

# Mahānāradakassapa-jātaka 経典類にみられる アーjeeヴィカ教の展開について

仲宗根 充修

本稿はブッダと同時代に活躍したマッカリ・ゴースーラに代表されるアーjeeヴィカ教の後の展開について考察した。その結果、アーjeeヴィカ教の見解として、ゴースーラの見解とされる輪廻浄化論に加えて、無論、断滅論、常住論などの見解が展開していったと考えられる。また、(1) Mahānāradakassapa-jātaka、(2) 『仏本行集経』 卷第四十三、(3) Nandaka-petavatthu のテキストについても比較して対照表を付した。(1)、(3) は Pali Text Society 版、(2) は『大正新脩大藏経』を使用した。

キーワード：ジャータカ、仏本行集経、ペータヴァットゥ、アーjeeヴィカ

## 1. はじめに

本稿で扱う (1) Mahānāradakassapa-jātaka (Mkj) と (2) 『仏本行集経』 卷第四十三とは平行話である。また、(3) Nandaka-petavatthu<sup>1)</sup> (Npv) には、(1) および (2) の類似平行句 (文) が多くみられる<sup>2)</sup>。表 1 は、(1) Mkj の主に韻文 (偈頌) に対応する (2) 『仏本行集経』 卷第四十三及び (3) Npv の類似平行句 (文) を並びかえて対照表としている。

## 2. アーjeeヴィカ教について

Mkj では、カッサバ姓のグナが裸形でアーjeeヴィカ教徒であることが明示されている<sup>3)</sup>。これに対応する『仏本行集経』 卷第四十三には、「裸形迦葉師」、「裸形迦葉道人」とあって<sup>4)</sup>、カーシャパ姓 (Kāśyapagotra) の裸形者であるとわかる。アーjeeヴィカ教徒が裸形であったことは<sup>5)</sup>、アーjeeヴィカ教の師らを acelakā<sup>6)</sup> (裸形者たち)、ājīvikapabbajjāṃ pabbajitvā acelako ahosi rajojalliko<sup>7)</sup> (アーjeeヴィカで出家して裸形で塵垢にまみれていた) などのフレーズや So sātakāṃ chaḍḍetvā acelako hutvā palāyi<sup>8)</sup> (かれ

は服を脱ぎ捨て、裸形で逃げた) というマッカリ・ゴースーラの伝記からも知られる。

アーjeeヴィカ教は、古層経典である『スッタニパータ』 (Suttanipāta) をはじめとして仏典にも多くの記述がみられ<sup>9)</sup>、仏教やジャイナ教と同様、アショーカ (Aśoka) 王の碑刻文にもその名が刻まれている<sup>10)</sup>。また、カウティリア (Kauṭilya) の『実利論』 (Arthaśāstra) には「…神や祖霊に対する儀式において仏教徒やアーjeeヴィカ教徒などの異教の修行者に食を給する者、以上の者は百パナの罰金を科す」とある<sup>11)</sup>。さらに『聖仙の語録』 (Isibhāsiyāim) には、アーjeeヴィカ教のマンカリプッタ (Mamkhaliputta) の思想がうかがえる<sup>12)</sup>。仏典やジャイナ教聖典におけるマッカリ・ゴースーラにかんする記述には、かれが牛小屋で生まれたことや一切智者であると自称したことなどの共通の記述もみられる<sup>13)</sup>。『注維摩詰経』には「末伽梨拘睺梨子 什曰。末伽梨字也。拘睺梨是其母也<sup>14)</sup>」、『維摩義記』には「末伽是字。拘睺母名。將母以別名拘睺梨子<sup>15)</sup>」、『律本事広註』<sup>16)</sup> (Skt.: Vinayavastuṭīkā, Tib.: 'Dul ba gzhi rgya-

cher 'grel pa) には、gnas lhas kyi bu kun du rgyu zhes bya ba yang gnas lhas kyi bu zhes bya ba ni ma'i ming yin la | kun du rgyu zhes bya ba ni rang gi ming yin no<sup>17)</sup> (ゴーシャリーブトラ・マスカリンという中のゴーシャリーブトラというのは母の名であって、マスカリンというのは自己の名である) とある。

カマラシーラ (Kamalaśīla, 8世紀後半活躍) の『修習次第』(Bhāvanākrama) には、アージーヴィカ教(と思われる)思想が言及されている。そこでは、業滅による輪廻からの解脱を説いている<sup>18)</sup>。

ヒンドウの叙事詩『バガヴァッド・ギーター』(Bhagavad-gītā) には、acchedyo 'yam adāhyo 'yam akledyo 'śoṣya eva ca, nityaḥ sarvagataḥ sthāṇur acalo 'yaṁ sanātanaḥ<sup>19)</sup> (かれは断たれず、焼かれず、濡られず、乾かされない。かれは常住であり、遍在し、堅固であり、不動であり、永遠である<sup>20)</sup>) とあって、(アージーヴィカ教の) 常住論に類する思想がみられる。さらにアージーヴィカ教の宿命論(決定論)が『バガヴァッド・ギーター』の本務遂行の考え方に類似すると指摘される<sup>21)</sup>。

アージーヴィカ教は、後にジャイナ教(裸形派)やヴィシュヌ派などに吸収され、最後には南インドにおいて14世紀ごろまでその存在が確認できる<sup>22)</sup>。

さて、ĀjīvikaもしくはĀjīvakaという呼称は、本来「生活法」あるいは「生活の規定を順守する者」を意味するが、漢訳仏典では「邪命外道」「無衣外道<sup>23)</sup>」などと訳出される<sup>24)</sup>。

### 3. 『仏本行集経』について

『仏本行集経』は、『歴代三宝紀』、『続高僧伝』<sup>25)</sup>、『大唐内典録』などによれば<sup>26)</sup>、北インド・ガンダーラ国プルシャブラ出身の沙門である闍那崛多(Jñānagupta, 523-600?)が、隋の開皇7-11 or 12 (587-591 or 592)年に訳出したものと伝えられている。闍那崛多は、北周第二代皇帝・明帝の武成年間(559-560年)に長安に入り、はじめ草堂寺(現在の中華人民共和国陝西省西安市郊外)に留まったが、ほどなくして(明帝の勅により闍那崛多のために建立された)四天王寺に移り、朝廷の庇護のもと訳経に従事した。草堂寺は鳩摩羅什が住したことで知られ、現在は鳩摩羅什の舍利塔や記念堂が建てられている。574年の北周第三代皇帝・武帝の廃仏の際、追放されて突厥へと逃れたが、581年隋が興ると、584年再び来朝し、585年以降長安の大興善寺(現在の中華人民共和国陝西省西安市雁塔区)で訳経を続けたと伝えられている<sup>27)</sup>。

この経の最後に「曇無徳師。名爲釋迦牟尼佛本行」とあって、法蔵部の所伝とされる<sup>28)</sup>。また『国訳一切経』『仏本行集経解題』には「本経の梵題は、次の経跋より推定してŚākyamunibuddhacarita若しくはBuddacaritasamgrahaと解せられ<sup>29)</sup>」るとあり、『仏典解題事典』には「原題はBuddha (-pūrva-) carita-samgrahasūtraとも、跋文からはŚākyamunibuddha (-pūrva-) -caritasūtraとも考えられる<sup>30)</sup>」とある。

表 1 Mahānārada-kassapa-jātaka 經典類対照表

(1) Mahānārada-kassapa-jātaka	(2) 『仏本行集經』 卷第四十三 (T. 3 no. 190)	(3) Nandaka-petavatthu
p. 225 <sup>13-17</sup> : ... rājā kiñci ajānantam naggabhoggaṃ nissirikaṃ andhabālaṃ ājīvikaṃ pucchi, so evaṃ pucchito ... attano micchāvādaṃ paṭṭhapesi 34ab: 979ab: Vedehassa vaco sutvā Kassapo etad abravī:  34cd: 979cd: suṇohi me mahārāja saccaṃ avitathaṃ padaṃ, 35ab: 980ab: N' atthi dhammacaritassa phalaṃ kalyāṇapāpakam,  35cd: 980cd: n' atthi ... paro loko, ko tato hi idhāgato, 36ab: 981ab: N' atthi ... pitaro vā, kuto mātā kuto pitā, 36cd: 981cd: n' atthi ācariyo nāma, adantaṃ ko damissati,  37ab: 982ab: Samathulyāni bhūtāni, n' atthi jeṭṭhāpacāyino, 37cd: 982cd: n' atthi balaṃ vā viriyam vā, kuto utṭhānaporisam, 37ef: 982ef: niyatāni hi bhūtāni, yathā goṭaviso tathā, 38a: 983a: Laddheyyam labhate macco, 38bc: 983bc: tattha dānaphalaṃ kuto, n' atthi dānaphalaṃ ...  38d: 983d: avaso ... avīriyo, 39abcd: 984abcd: Bālehi dānaṃ paññattaṃ paṇḍitehi paṭicchitaṃ, avasā denti dhīraṇaṃ bālā paṇḍitaṃ ānino ti. 40ab: 985ab: Satt' ime sassatā kāyā acchejjā avikopino: 40cdef: 985cdef: tejo paṭhavī āpo ca vāyo sukhadukhañ c' ime jīvo ca, satt' ime kāyā yesaṃ chettā na vijjati,	T. 3 no. 190, 853b13-14: 世間幽冥愚 癡人 或實或虛或妄語 以彼無有智慧 故 觸語不能辯了知  Cf. T. 3 no. 190, 853b10-11: 大王善聽. 是中所有至真實者. 此之真義. 我今當 說. Cf. T. 3 no. 190, 853c03: 如是之法次 第說 大王今者應當知 T. 3 no. 190, 853b15: 諸業一切雜種無 善惡果報亦不有  T. 3 no. 190, 853b16: 夜叉等身亦非實 況復得有上諸天 T. 3 no. 190, 853b17: 此世彼世悉皆絕  T. 3 no. 190, 853b17: 又復無有父母親  T. 3 no. 190, 853b18-19: 沙門及婆羅 門等 而彼一切皆悉空 世間師等亦 復無 更有誰能被調伏  Cf. T. 3 no. 190, 853b22: 所應死者其 自死 T. 3 no. 190, 853b22: 行施已後無果收  T. 3 no. 190, 853b20-21: 愚癡人輩教 他施 智人聞已心不隨 若有善誑取 他財 彼實愚癡目言智  T. 3 no. 190, 853b23: 此身一切常相連 欲言斷者無有是 T. 3 no. 190, 853b24-25: 所有火風及 地水 若苦不苦并樂時 第七即是壽 命根	23ab: 679ab: Vipāko natthi dānassa saṃyamassa kuto phalaṃ  26b: 682b: loko natthi ito paraṃ  26a: 682a: Natthi mātā pitā bhātā  23cd: 679cd: natthi ācariyo nāma adantaṃ ko damessati.  Cf. 25b: 681b: na visodheti verinaṃ 24ab: 680ab: Samatulyāni bhūtāni kuto jeṭṭhāpacāyiko 24cd: 680cd: natthi balaṃ viriyam vā kuto utṭhānaporisam. 25d: 681d: niyatipariṇāmajā.  25c: 681c: laddheyyam labhate macco  25a: 681a: Natthi dānaphalaṃ nāma 26cd: 682cd: natthi dinnaṃ natthi hutaṃ sunihitaṃ pi na vijjati.  Cf. 28a: 684a: Acchejjabhejjo jīvo Cf. 28d: 684d: ko jīvaṃ chettum arahati.

(1) Mahānāradakassapa-jātaka	(2) 『仏本行集經』 卷第四十三 (T. 3 no. 190)	(3) Nandaka-petavatthu
<p>41ab: 986ab: N' atthi hantā vā chettā vā haññare vāpi koci naṃ,</p> <p>41cd: 986cd: antaren' eva kāyāṃ satthāni vūtivattare.</p> <p>42abc: 987abc: Yo p' āyaṃ sirāṃ ādāya paresaṃ nisitāsinaṃ na so chindati te kāye,</p> <p>42d: 987d: tattha pāpaphalaṃ kuto.</p> <p>43ab: 988ab: Cullāsītimahākappe sabbe sujjhanti saṃsaraṃ,</p> <p>43cd: 988cd: anāgate tamhi kāle saññato pi na sujjhati.</p> <p>44ab: 989ab: Caritvāpi bahuṃ bhadraṃ n' eva sujjhanti nāgate,</p> <p>44cd: 989cd: pāpaṇ ce pi bahuṃ katvā taṃ khaṇaṃ nātivattare.</p>	<p>T. 3 no. 190, 853b25: 此等無有能殺者</p> <p>T. 3 no. 190, 853b26: 諸身及命兩間内 器仗從中自運行</p> <p>Cf. T. 3 no. 190, 853b27-28: 世間愚癡 人不知 謂言此被傷害死 如是怖畏 名不智 若受是名智慧人</p> <p>T. 3 no. 190, 853b29-c01: 一經八萬 四千生 流轉之時方得脫 如是煩惱 乃能淨 八萬四千生後周</p> <p>Cf. T. 3 no. 190, 853c2: 流轉無有錯亂 期</p> <p>Cf. T. 3 no. 190, 853c2: 流轉無有錯亂 期</p>	<p>Cf. 27abc: 683abc: Yo pi haneyya purisaṃ parassa chindate sirāṃ na koci kiñci hanati</p> <p>27d: 683d: sattannaṃ vivaram antare.</p> <p>27abc: 683abc: Yo pi haneyya purisaṃ parassa chindate sirāṃ na koci kiñci hanati</p> <p>28b: 684b: aṭṭhaṃso guḷaparimaṇḍalo</p> <p>28c: 684c: yojanānaṃ satama pañca<sup>31)</sup></p> <p>29abcd: 685abcd: Yathā suttaguḷe khitte nibbheṭhentaṃ palāyati evam evam pi so jīvo nibbheṭhento palāyati.</p> <p>30abcd: 686abcd: Yathā gāmato nikkhamma aññaṃ gāmaṃ pavisati evam evam pi so jīvo aññaṃ kāyaṃ pavisati.<sup>32)</sup></p> <p>31abcd: 687abcd: Yathā gehato nikkhamma aññaṃ gehaṃ pavisati evam evam pi so jīvo aññaṃ bondiṃ pavisati.<sup>33)</sup></p> <p>32abcd: 688abcd: Cūlāsīti mahākappuno sataṣaṇṇāni pi hi ye bālā ye ca paṇḍitā saṃsāraṃ khepayitvāna dukkhassa' antaṃ karissare.</p> <p>Cf. 33abcd: 689abcd: Mitāni sukhadukkhāni doṇehi piṭakehi ca jīno sabbaṃ pajānāti sammūlha itarā pajā.</p> <p>Cf. 33abcd: 689abcd: Mitāni sukhadukkhāni doṇehi piṭakehi ca jīno sabbaṃ pajānāti sammūlha itarā pajā.</p>

(1) Mahānārada-kassapa-jātaka	(2) 『仏本行集経』 卷第四十三 (T. 3 no. 190)	(3) Nandaka-petavatthu
45ab: 990ab: Anuppubbena no suddhi kappānaṃ cullasītiyā,	Cf. T. 3 no. 190, 853b29-c1: 一經八萬 四千生 流轉之時方得脱 如是煩惱 乃能淨 八萬四千生後周	Cf. 32abcd: 688abcd: Cūlasīti mahākappuno sataṣaḥassāni pi hi ye bālā ye ca paṇḍitā saṃsāraṃ khepayitvāna dukkhass' antaṃ karissare.
45cd: 990cd: niyatim nātivattāma velantaṃ iva sāgaro ti.	Cf. T. 3 no. 190, 853c2: 猶如海潮波依 限	

#### 4. Mkj とその対応経典との比較

『長部』『沙門果経』などの資料によると、無論は「布施、この世、あの世、父母、善行・悪行の果報や異熟、阿羅漢などはない。断滅論は「人間は四大元素（地、水、火、風）から構成されており、死後、諸元素はそれぞれに分解され、諸の感覚器官は虚空に転移し、愚者も賢者も死後に存在することはない」というものである<sup>34)</sup>。常住論は「人間は七身（地身、水身、火身、風身、諸の苦、諸の楽、生命）から構成され、これらは常住不変であり、相互に影響を与えることはなく、ある人が鋭利な剣である人の頭を断ち切っても生命を奪ったことにはならない」というものである。輪廻浄化論は「愚者も賢者も長期間流転し、最後は輪廻から解放されて苦の終わりとするのであって、それはちょうど糸玉が上空に投げられると解けながら大地に落ちるように最後には苦の終わりとする」というものである。決定論は「諸の衆生は無因無縁から汚れ、あるいは浄まるのであり、定めと和合と生来の性質によって変化し、六種の生まれの境遇（六生類）においてのみ苦楽を感受する」というものである。

Mkj、『仏本行集経』 卷第四十三、Npv には、アーjeeヴィカ教の見解として、無論、断滅論、常住論、輪廻浄化論が説かれている。特に、Mkj 40: 985 ~ Mkj 45: 990 は常住論と輪廻浄化論を

合せた内容となっている（連続して説かれている）。マッカリ・ゴースーラの見解とされる輪廻浄化論に加えて、無論、断滅論、常住論などの見解が取り入れられていることがわかる。

『小部』『スッタニパータ』 第 381 偈に対する註釈には、Tattha titthiyā ti Nanda-Vaccha-Saṃkiccehi ādipuggalehi tīhi titthakarehi kate diṭṭhititthe jātā, tesam sāsane pabbajitā Pūraṇakassapādayo cha satthāro, tattha Nāthaputto Nigaṇṭho, avasesā ājīvika<sup>35)</sup>（そこで、「異教徒」というのは、ナンダ、ヴァッチャ、サンキッチャという 3 人の始祖・教祖によって作られた見解の渡し場に生まれた人びとで、かれらの教えにおいて出家したプーラナ・カッサパなどの 6 人の師である。そこでナータプッタはニガンタで、その他はアーjeeヴィカ教徒たちである<sup>36)</sup>）とあり、このことは、(梵文)『破僧事』、『根本説一切有部毘奈耶』、『根本説一切有部毘奈耶出家事』、『阿毘達磨發智論』、『阿毘達磨大婆沙論』（いずれも説一切有部に帰属する資料）における無論、断滅論の論者であるプーラナ・カーシャパが、(梵文)『破僧事』において、pūraṇaḥ kāśyapaḥ saṅghī ca, gaṇī ca, gaṇācāryaś ca, sādhu-rūpasammatō bahujaṇasya, mahatā ca janakāyena sampuraskṛtaḥ pañcamātrāṇām ājivikaśatānām pramukhaḥ<sup>37)</sup>（かのプーラナ・カーシャパは、サンガの主、教団の長、教団の

師であり、端正な容貌をしていると多くの人々に称賛され、そして大いなる民衆に尊敬され、五百人のアージーヴィカ教徒に敬われている<sup>38)</sup>などと記述されていることとも矛盾しない<sup>39)</sup>。

また『増支部』には、Pūraṇena ... Kassapena chaḷābhijātiyo paññattā<sup>40)</sup>（プーラナ・カッサパによって、六生類が施設された）とあり、『阿毘達磨大毘婆沙論』には、常住論（アジタの見解）の中の六勝生類に対する解説の中で「満迦葉波外道」（プーラナ・カーシャパ）が施設したとある<sup>41)</sup>。すなわち、プーラナ・カッサパ（プーラナ・カーシャパ）によって（アージーヴィカ教の見解である）六（勝）生類説が施設されたという記述が、上座部大寺派および説一切有部に帰属する資料にみられる<sup>42)</sup>。

また、『俱舍論』には、常住論がアージーヴィカ教の見解として紹介されている<sup>43)</sup>。

すなわち、説一切有部に帰属する資料には、アージーヴィカの見解として、マスカリン・ゴシャーリープトラの見解の他に、無論、断滅論（プーラナ・カーシャパの見解）、常住論、輪廻浄化論（アジタ・ケーシャカンバラの見解）などがみられる。

宇井伯寿<sup>44)</sup>、高木諄元<sup>45)</sup>、高橋審也<sup>46)</sup>らの先行研究によれば、アージーヴィカ教徒は、マツカリ・ゴサーラの他に、プーラナ・カッサパ（無作用論者）、パクダ・カッチャーヤナ（常住論者）が広義のアージーヴィカ教徒として認識される。

バシムは、『破僧事』（の蔵文）にみられる常住論と輪廻浄化論は『長部』「沙門果経」ではなく、『中部』no. 76 にもとづいている可能性を指摘している<sup>47)</sup>。また南は、『中部』no. 76 と『相应部』no. 24 は、『長阿含経』「沙門果経」の四要素（無作用論、無論、断滅論、決定論）に、

新たに常住論と輪廻浄化論が一説として加えられたようになっており、この二要素の連関は伝承系統の異なる『破僧事』とも共通していると述べている。さらに、このような構成要素の量的な差異と異同は教説内容の成立史的な問題を考慮するうえで注意するべきであり、むしろ『長部』「沙門果経」の方が特異であると述べている<sup>48)</sup>。すなわち、『中部』no. 76、『相应部』no. 24、『破僧事』などにみられる常住論と輪廻浄化論が、教説内容の成立史的な問題として指摘されている<sup>49)</sup>。

## 5. おわりに

Mkj、『仏本行集経』卷第四十三、Npvにみられるアージーヴィカ教の見解には、無論、断滅論、常住論、輪廻浄化論などがみられることや、また特に常住論と輪廻浄化論が合わさった内容であることから、後の展開を経たアージーヴィカ教の見解を反映している可能性が考えられる<sup>50)</sup>。ここにみられるアージーヴィカ教の見解は、タミル古典文学の叙事詩『マニメーハライ』<sup>51)</sup>にみられるものとも矛盾しない。

ただし、Mkj 37cd: 982cd: n' atthi balaṃ vā viriyaṃ vā, kuto utthānaporisam<sup>52)</sup>、Npv 24cd: 680cd: natthi balaṃ viriyaṃ vā kuto utthānaporisam<sup>53)</sup>などの決定論は、『長部』「沙門果経」: n' atthi balaṃ n' atthi viriyaṃ, ... n' atthi purisa-parakkamo<sup>54)</sup>、『雑阿含経』卷第七: 無力無精進…無士夫方便精進<sup>55)</sup>、梵文『破僧事」: nāsti balaṃ; nāsti vīryam ... nāsti puruṣakāraparākramah<sup>56)</sup>、『根本説一切有部毘奈耶」: 一切有情無力無勤. 無勇無進<sup>57)</sup>、『阿毘達磨發智論』『阿毘達磨大婆沙論」: 無力…無士威勢<sup>58)</sup>や、ジャイナ教聖典 Uvāsaga Dasāo にみられる「奮起はなく、業はなく、力はなく、精進はなく、人の所作の努力はない。一切の存在は定められ



ている<sup>59)</sup>」というゴーサーラ・マンカリプッタの見解と一致するが、『仏本行集経』巻四十三には(韻文部分・散文部分ともに)みあたらず、これに類するような文は説かれていない。

最後に、バシヤムは決定論(運命論)について「…運命論の教義は、すべての変化・動きは幻影で世界は実には永遠に不動に休息しているというパルメニデスの見解に進化していった」と述べている<sup>60)</sup>。

# 註

- 1) 藤本 (2007), (2016).
- 2) 拙論 (2023) A, (2023) B.
- 3) Guṇa Kassapagott' (J VI, p. 222<sup>24</sup>); acela (J VI, p. 222<sup>23</sup>); naggabhoga (J VI, p. 225<sup>14</sup>); acelaka (J VI, p. 255<sup>8</sup>); ājīvika (J VI, p. 225<sup>14</sup>). Cf. DPPN, s. v. "28. Kassapa," "1. Kassapagotta"; DBPN, s. v. "Guṇa," "Kassapa-gotta3".
- 4) T. 3 no. 190, p. 853a24, c4; T. 3 no. 190, p. 853b1, b6, b9-10, c22, c24.
- 5) 雲井 (1967: 132-139).
- 6) MN I, p. 238<sup>14</sup>.
- 7) J I, p. 390<sup>17-18</sup>.
- 8) Sv I, p. 144<sup>4</sup>; Ps II, p. 233<sup>22-23</sup>; Ss, p. 154<sup>21</sup>.
- 9) Sn 381; SN I, p. 66<sup>9-14, 23</sup> (SN II 3 10 Nānātitthiyasuttam): cf. T. 2 no. 99, 359c2-5; T. 2 no. 100 478a4-6.
- 10) 塚本 (1976: 25-26, 42, 48, 53, 72, 133, 141, 190), Tsukamoto (2010-2012), 中村 (1997: 674). Cf. 定方 (2024: 221).
- 11) Kangle (1969: 124<sup>24-25</sup>), (1972: 252), (1965: 98-99, 155). 金倉 (1939: 192). 上村 (1984: 314).
- 12) 松濤 (1966: 78-79); 高木 (1982); 中村 (1991: 91-93, 95-96); 渡辺 (1984), (1996).
- 13) Pj II, p. 423<sup>3-6</sup>; Sv I, pp. 143<sup>30</sup>-144<sup>5</sup>; Divy 143<sup>9-11</sup>; 村上・及川 (1988: 180), 高橋 (1992B: 171ff.), 浪花 (1998: 287), 上田・堀田 (2020: 71, 75, 94).
- 14) T. 38 no. 1775, 350c21-22.
- 15) T. 38 no. 1776, 452a22-23.
- 16) 『律本事広註』 *Vinayavastuṭīkā* は『根本説一切有部毘奈耶出家事』に対するカルヤーナミトラによる註釈書である。註釈者についての詳細は不明であるが、これと同一の書名が9世紀前半に成立したとされる『デンカルマ目録』に記載される。Cf. 『デンカルマ目録』494: 'dul ba bzhi'i (=gzhi'i) rgya cher'grel

- la. Cf. Lalou (1953: 330), 芳村 (1974: 162), 沖本 (1985: 406). もしこの目録に記載される書名が、現存する『律本事広註』を指すのであるならば、この資料は遅くとも9世紀前半までにチベット語に翻訳されたと考えられる。Cf. 芳村 (1974: 109-114), 山口 (1985), 原田 (1982), 羽田野 (1983: 283).
- 17) P. no. 5615 Dsu 216a2-3 / D. no. 4113 Tsu 196b1.
- 18) Bhk, pp. 13-14: yas tu manya (te | cittavikalpa) sa mutthāpitaśubhāśubhakarmavaśena sattvāḥ svargādi karmaphalam anubhavantaḥ saṃsāre saṃsaranti | ye punar na kiṃcic cintayanti nāpi kiṃcit karma kurvanti te parimucyante saṃsārāt | tasmān na kiṃcic cintayitavyam | nāpi dānādikuśakacaryā kartavyā | kevalaṃ mūrkhajanam adhikṛtya dānādikuśalacaryā nirdiṣṭeti | Bhk, p. 20: yac cāpy ucyate | na kiṃcit kuśalādikarma kartavyam iti | tatraivaivamvadatā karmakṣayān muktir ity ājīvakaḥ (dābhyupagamo) bhavet | Cf. 高木 (1982: 327-328, 339), (1985: 168, 171).
- 19) MBh, 6. 2. 24.
- 20) 鑑 (1998: 44-45), 上村 (1992: 36), (2002: 93-94).
- 21) Warder (1956: 44); 谷川 (1997: 105); 野沢 (2003: 49 注 19).
- 22) 金倉 (1939: 192), Basham (1951: 187ff.), 宇井 (1965: 372), 原 (1988: 103-104), 中村 (1991: 108), 高橋 (1992B: 185-186), 谷川 (1997: 105), 野沢 (2003: 34), バシヤム (2004: 292-293).
- 23) T. 27 no. 1545, 993c25-26.
- 24) 金倉 (1939: 192-193), 雲井 (1967: 125ff.), 高木 (1981: 4), 高橋 (1992A: 169), 渡辺 (1996: 39).
- 25) 『続高僧伝 I』, p. 44-49, 237-242.
- 26) T. 49 no. 2034, 103b20-104c6; T. 50 no. 2060, 433b7-434c13; T. 55 no. 2149, 276a4-277a14.
- 27) 『仏書解説大辞典』, s.v. "仏本行集経"; 『仏典解題事典』, s.v. "仏本行集経". Cf. 佐々木 (1988: 5-8).
- 28) 『大乘経典解題事典』, p. 11.
- 29) 『国訳一切経』「仏本行集経解題」, p. 2.
- 30) 『仏典解題事典』, p. 71.
- 31) Cf. Jayatilake (2008: 101-102). Cf. 佐保田 (1983: 20, 229), 服部 (2005: 142-143), 湯田 (2010: 233, 468), 岩本 (2013: 71, 307-308).
- 32) Cf. MBh, 2. 22: 上村 (1992: 35), (2002: 93), (2007: 42).
- 33) 註 32 参照.
- 34) Cf. 畑 (2002).
- 35) Pj II, p. 372<sup>8-12</sup>.

- 36) Cf. 村上・及川 (1986: 671-672, cf. 693-694 の註 9).
- 37) SBV II, 217<sup>8-11</sup>.
- 38) Cf. 平岡 (2024: 289).
- 39) Basham (1951: 80, 198-199); 高木 (1991: 136).
- 40) AN III, p. 383<sup>18</sup> (AN Chakkanipāta Mahāvagga LVII).
- 41) T. 27 no. 1545, 992b18.
- 42) 拙論 (2021).
- 43) AKBh, p. 300<sup>1-4</sup>; evaṃ sati paramāṇavo nityāḥ prāpnuvanti | paramāṇusamcayavibhāgamātram caivaṃ sati prāpnoti na tu kiṃcid utpadyate nāpi nirudhyata ity ājīvikavāda ālambito bhavati |; T. 29 no. 1558, 105c13-15: 則極微色其體應常。又色唯應極微聚散竟無少分可名生滅。是則遵崇邪命者論...; T. 29 no. 1559, 259a18-21: 若汝執彼色由隣虛分散。若爾隣虛應成常住。唯有隣虛和合及分散。無有一物能生能滅。汝今便信受裸形外道執...; 小谷・本庄 (2007: 119). Cf. AKVy, p. 474<sup>29-32</sup>; evaṃ sati tādavasthyān nityāḥ paramāṇavaḥ syuḥ anāgatāḥ pratyutpannā atītās ca ta eva ta iti. evaṃ ca sati pramāṇu-samcaya-vibhāga-mātram eva prāpnoti. na tu kaścid utpādo nāpi nirodha ity Ājīvikānām pāṣaṇḍinām vādaḥ parighhito bhavati; 小谷・本庄 (2007: 135). Cf. 高橋 (1992B: 182).
- 44) 宇井 (1965: 393).
- 45) 高木 (1973: 5, 10), (1981: 5), (1985: 164).
- 46) 高橋 (1992B: 182).
- 47) Basham (1951: 22-23).
- 48) 南 (1985: 24-25).
- 49) 神山 (2012: 67 の註 13).
- 50) Basham (1951: 20). Cf. J 379 Nerujātaka (J III, 246<sup>15-19</sup>) には、常住論者、斷滅論者、裸行者がそれぞれ別のグループとして描かれている。
- 51) Daniélou (1989: 133-135); 彦坂 (2003: 279-282).
- 52) J VI, p. 225<sup>26</sup>.
- 53) Pv, p. 80<sup>31</sup>.
- 54) DN I, 53<sup>29-31</sup>.
- 55) T. 2 no. 99, 44a4-5.
- 56) SBV II, p. 222<sup>5-6</sup>.
- 57) T. 23 no. 1442, 693a2.
- 58) T. 26 no. 1544, 1027c11-12; T. 27 no. 1545, 990b17-18.
- 59) Hoernle (1889: 110-111), Basham (1951: 218), 雲井 (1967: 77), 高橋 (1973: 647), 中村 (1991: 96), 拙論 (2006).
- 60) Basham (1967: 296), バシヤム (2004: 293).

## 参考文献

### 第一次文献

パーリ語テキストについてはすべて Pali Text Society 版を使用した。

Bhk = Ed. by Tucci, *Minor Buddhist Texts part III, Third Bhāvanākrama* (*Serie Orientale Roma XLIII*), Roma Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1971.

D = *The Tibetan Tripiṭaka*, Taipei Edition, Taipei, 1991.

DBPN = Ed. by Chizen Akanuma 赤沼智善, A Dictionary of Buddhist Proper Names 印度佛教固有名詞辞典.

DPPN = Ed. by G. P. Malalasekera, Dictionary of Pāli Proper Names.

Divy = Ed. by E. B. Cowell and R. A. Neil, *The Divyāvadāna, A Collection of Early Buddhist Legends*, Indological Book House, 1887.

MBh = Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Language, Mahabharata: Bhagavad-Gita, Georg-August-Universität Göttingen.

P = *The Tibetan Tripiṭaka*, Peking Edition, Tokyo/Kyoto, 1957.

SBV = Ed. by R. Gnoli, *Saṅghabhedavastu (The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu: Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin, part I-II*, Roma, Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1977-1978).

T. = 大正新脩大藏經

『国訳一切経』=『國譯一切經 印度撰述部 本縁部三』, 大東出版社, 1994 年.

『統高僧伝 I』(新国訳大藏經・中国撰述部①-3〈史伝部〉) 吉村誠・山口弘江, 大蔵出版, 2012 年.

『大乘経典解説事典』勝崎裕彦・小峰弥彦・下田正弘・渡辺章悟 (編著), 北辰堂, 1997 年.

『仏書解説大辞典』=『佛書解説大辭典』(縮刷版) 小野玄妙・丸山孝雄 (編纂), 大東出版社, 1999 年.

『仏典解題事典』(一新・仏典解題事典第二版一) 水野弘元・中村元・平川彰・玉城康四郎 (責任編集), 春秋社, 1977 年.

### 第二次文献

Basham A. L. 1951. *History of Doctrines of the Ājīvikas*, London.

Basham A. L. 1967. *The Wonder That Was India*, Third Revised Edition, Rupa.

Daniélou, Alain 1989. *Manimekhalai: The Dancer with the Magic Bowl*, New York.



- Hoernle 1889. *The Uvāsagadasāo, or the Religious Profession of an Uvāsaga Expounded in Ten Lectures Being the Seventh Anga of the Jains*, Calcutta.
- Jayatilke, K. N. 2008. *Ealy Buddhist Theory of Knowledge*, Routledge.
- R. P. Kangle 1969, 1972, 1965. *The Kauṭīliya Arthaśāstra (Second Edition), Part I: A Critical Edition with a Glossary, Part II: an English Translation with Critical and Explanatory Notes (Second Edition), Part III: a Study*, University of Bombay.
- Lalou, Marcelle 1953. "Contribution à la bibliographie du Kanjur et du Tanjur: Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-sroñ-lde-bcan," *Journal Asiatique*, 241: 313-353.
- Tsukamoto 2010-2012. *A Comprehensive Study of the Aśokan Inscription*, vol. I-III, Tokyo.
- Warder, A. K. 1956. "On the Relationships between Early Buddhism and Other Contemporary Systems," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, The School of Oriental and African Studies: 18-1: 43-63.
- 岩本裕 2013『原典訳ウパニシャッド』筑摩書房.
- 宇井伯寿 1965『印度哲學研究 第二』岩波書店.
- 上田真啓・堀田和義 2020「ゴースラ伝—*Viyāhapannatti* 第15章和訳(1)—」『仏教文化研究論集』20: 62-99.
- 沖本克己 1985「律文献」『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』大東出版社: 395-418.
- 金倉圓照 1939『印度古代精神史』岩波書店.
- 神山清高 2012「沙門果経類における六師外道の所説について」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』34: 51-68.
- 上村勝彦 1984『カウティリヤ 実利論(上)』岩波書店.
- 1992『バガヴァッド・ギーター』岩波書店.
- 2002『原典訳 マハーバーラタ 6』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房.
- 2007『バガヴァッド・ギーターの世界』筑摩書房.
- 雲井昭善 1967『仏教興起時代の思想研究』平楽寺書店.
- 小谷信千代・本庄良文 2007『俱舍論の原典研究 随眠品』大蔵出版.
- 佐々木孝憲 1988「闍那崛多訳を中心とした漢訳経典に見られる代詞「彼」の用例—法華経普門品の「我今重問彼」における「彼」の読みに関連して—」『立正大学大学院紀要』4: 1-30.
- 定方晟 2024『アショーカ王伝』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房.
- 佐佐田鶴治 1983『ウパニシャッド』(新装版) 平河出版社.
- 高木神元 1973「沙門果経にみられる六師外道と経作者の意図」『仏教学会報』4, 5: 1-12.
- 1981「初期仏教研究備忘(一)—アーjeeヴィカ教と道德律—」『仏教学会報』7: 3-10.
- 1982「沙門の解脱道—「聖仙の語録」を中心として—」『論集』9: 313-340(『初期仏教思想の研究』(高木神元著作集 3): 1991: 63-88、法蔵館に再録).
- 1985『「沙門果経」と六師外道』雲井昭善博士古稀記念 仏教と異宗教 平楽寺書店: 159-171.
- 1991『初期仏教思想の研究』(高木神元著作集 3) 法蔵館.
- 高橋審也 1973「アーjeeヴィカの業思想について(一)」『印仏研』21-2: 432-436.
- 1992A「原始仏教とアーjeeヴィカ教(1)」『アーガマ』123: 150-169.
- 1992B「原始仏教とアーjeeヴィカ教(2)」『アーガマ』124: 170-186.
- 谷川泰教 1997「仏教とアーjeeヴィカ」『日本佛教学会年報』62: 103-116.
- 塚本啓祥 1976『アショーカ王碑文』第三文明社.
- 仲宗根充修 2006「初期仏典に見られる常住論、断滅論、無因論、及び縁起説の立場からの批判」『印仏研』54-2: 160-164.
- 2021「仏典にみられるアーjeeヴィカ教の六生類説について」『印仏研』70-1: 31-37.
- 2023A「Nandakapetavatthuにみられる偈頌について」『印仏研』71-2: 40-46.
- 2023B「Mahānārada-kassajātakaにみられる偈頌について」『印仏研』72-1: 29-35.
- 中村元 1991『思想の自由とジャイナ教』(中村元選集[決定版] 第10巻) 春秋社.
- 1997『インド史Ⅱ』(中村元選集[決定版] 第6巻) 春秋社.
- 浪花宣明 1998「サーラサンガハの研究—仏教教理の精要—」平楽寺書店.
- 野沢正信 2003「古代インドの宿命論アーjeeヴィカ教について」『印度哲学仏教学』18: 34-51.
- バシム著、日野紹運他訳 2004『バシムのインド百科』(改訂版) 山喜房仏書林.
- 畑昌利 2002「初期仏典における断滅論の諸相」『待兼山論叢 哲学篇』36: 33-49.
- 服部正明 2005『古代インドの神秘思想 初期ウパニシャッドの世界』講談社.
- 羽田野伯猷 1983「チベット流伝前期の王室仏教備考—勅裁小品 Vyutpatti と目録デンカルマをめぐって—」

- 『仏教と文化』 同朋舎出版: 281-312.
- 原実 1988 「シヴァ教諸派」『インド思想 2』(岩波講座東洋思想第6巻) 岩波書店: 94-117.
- 原田覺 1982 「IDan dkar ma 目録考」『田村芳朗博士還暦記念論集 仏教教理の研究』 春秋社: 607-617.
- 彦坂周 2003 『マニメーハライ: 不思議な鉢をもった少女の出家物語』 きこ書房.
- 平岡聡 2024 『ブッダ奇しき事跡 梵文根本説一切有部律破僧事全訳 下』 法蔵館.
- 藤本晃 2007 『死者たちの物語『餓鬼事経』 和訳と解説』 国書刊行会.
- 2016 『餓鬼事経 死者たちの物語』 サンガ.
- 松 濤 誠 廉 1966 「聖仙の語録—ジャイナ教聖典 Isibhāsiyāṃ 和訳—」『九州大学文学部創立四十周年記念論文集』: 57-140.
- 南清隆 1985 「Sāmaññaphala-sutta 覚書」『華頂短期大学研究紀要』 30: (21) - (32).
- 村上真完、及川真介 1986 『仏のことば註—パラマッタ・ジョーティカー— 2』 春秋社.
- 1988 『仏のことば註—パラマッタ・ジョーティカー— 3』 春秋社.
- 山口瑞鳳 1985 「『デンカルマ』 八二四年成立説」『成田山仏教研究所紀要』 9: 1-61.
- 湯田豊 2010 『ウパニシャッド—翻訳および解説—』(第5版) 大東出版社.
- 芳村修基 1974 『インド大乘仏教思想研究—カマラシーラ の思想—』 百華苑.
- 鎧淳 1998 『完訳バガヴァッド・ギーター』 中央公論社.
- 渡辺研二 1984 「マンカリブッタの教説 (1)」『印仏研』 32-2: 39-42.
- 1996 「ゴースーラ・マンカリブッタの研究序説—アージーヴィカ教再評価の試み—」『ジャイナ教研究』 2-2: 39-52.